

第十五回 三度目の危機を超えて（一）

私のアイデンティティが失われそうになったと感じた最初は、社会から置いてきぼりになったと感じた時だ。置いてきぼりという表現は正確ではないかもしれない。自分から選択したことだから。私は、大学四年の時に出会ったO市の歴史的環境を残す市民運動に十年近く関わっていた。その間、大学院に籍をおきながら大半の時間を市民運動に費やしていた。明治、大正、昭和初期と三代にわたってつくられてきた歴史的環境のど真ん中に計画された道路の見直しを求めた運動だが、都市計画決定済みで工事にも着手していた道路の見直しは困難を極めた。終盤には市民のおよそ半数にのぼる道路計画見直しを求める署名を集めるところまでいったのだが、結果的には歴史的環境の一部を残す妥協案で決着し苦い敗北感を味わうことになる。それまでの決着の見えない長い時間と闘っているうちに三十才も目前になり、その時に、例のものが襲ってきた。まわりを見れば同世代の友人たちは、皆、ひとかどの地位につき社会的実績をあげていた。私といえば、積み重ねたのは年だけという状態で、この先どうしたら良いのか、先の見えないくらい闇に覆われた感じであった。

その状況から逃れるために選択したのが、大学時代からの友人で市民運動を共にしてきたYと建築の設計と都市計画の事務所を起業するという道だった。二人ともさしたる専門知識や技術を学んだわけでもなく、大胆な選択であったと思うのだが。

ただ、いろいろな方の力をいただきながら、Yは主に設計の分野で、私は主に都市計画の分野で、それなりの成果をあげることができたのは、振り返ってみれば若さの力だったかと思う。それと、なまじ専門知識や技術を学んでこなかったのが良かったのかもしれない。後に、都市デザインに三次元コンピュータグラフィックを計画ツールとして導入することにチャレンジできたのも、世の中が都市計画に住民参加の必要性や、住民主体のまちづくりの重要性が認識され始めた時に、すでに長年の市民運動で身についた感覚が活かされたのも、まさに素人であったから純真に信じているところを進められたのだと思う。

事務所をYと立ち上げてから十五年ほどたち、ようやく仕事は認められるようになったが、その間、寝る間のないという表現がおおげさでもない状態が続いていた。それに二人とも要領が悪いのか、働けば働くほど借金が増えるという経営状態だった。Yは一途にものごとを突き詰めるタイプだったし、自分自身を絶対的に信じ、それと異なる人とは鋭く対立することもしばしばあった。それが彼の持ち味とわかりつつも、このままで良いのかと深く悩んだのが二番目の転機になった。

結果的に、事務所を二つに分け、私は多額の負債とともにこれまでの自治体との契約実績を引き継ぐかたちで、現在の事務所建て直すことにした。当然、経営的には負債の返済がキャッシュフローに重く響き薄氷を踏む思いであったが、なんとか徐々に安定し、スタッフにも恵まれ良い環境で仕事をする事ができるようになったのだ。



この自分にとって二回の危機をなんとか乗り越えられたのは、家族をはじめ様々な方々の力があってだと思っているが、自分自身でいえば「今なら、もし、仮にうまくいかなくてもなんとか立ち直ることができるかもしれない。」という気になれる若さが何よりだと感じている。

その経験があつて、事務所を引き継いでもらうなら、後継者が若いうちになければならないという気持ちになつたのだ。ただ、そのことが、私自身の三度目の危機になろうとは思つてもいなかった。ちょうど友人のYが、長年の研究成果や取組実績を高く評価され、立て続けに名だたる賞を受賞され、書籍も発表されるなどしたことは本当に目出度くもあり、一方で、引退後の自分がないものであるのかを思つていた私には、正直、感慨深いものがあつた。

こうやつて振り返ると、人から認めて欲しいとか、社会的評価を気にして、引退後の自分を不安に思うのは、なんと不遜なことかと思ふが、そうだったのだからしょうがない。ひとは何をもつて生きていると実感できるのかと、哲学的な問いかけをしても答えを見出すほどの頭もなく、仏陀の悟りはなんだつたのかと本を何冊か目を通したが眠くなるばかり。そもそも仏陀が向き合つた苦悩は、生、病、老、死と根源的なもので、私が抱える苦悩とは次元が違つた。

そうこうしている時に手を差し伸べてくれたのが、この竹山の土地だつた。それは、当初思い描いてきた野遊びの楽しみが救つてくれたわけではない。もちろん、薪を無心に割つたり、土を耕したりするのは楽しく時間を忘れさせてくれたが、それらが心の不安を埋めてくれるほど簡単な話ではなかつた。

竹山の土地の何が私を救つたのかを説明するのは、なかなか難しい。まわりの草や木や鳥たちを見ているうちにそういう気になつたという説明になつていないが、手短かに言うとそういうことになる。

引退して竹山にいる時間が長くなつたことにより、夜明けから日が沈むまで、春から夏、秋、冬と同じ場所をじつと見続けることは、今までになかつた体験であつた。ずっとそこにあるように見える草や木も同じようにでいてそうではない。同じ夜明けでも昨日と同じではないし、春がやってきたといつても昨年の春とは異なる。竹山の小さな広がりであっても、そこにいる草や木や鳥たちは、常に流れる川のように同じようである変化をしていつている。新しく加わるものもあれば、いつの間にか姿が見えなくなっているものもある。それでも竹山の風景は変わらず目の前にある。

最初にこの土地を下見に来た時に、一本の木が目が止まつた。それは大きく折れ曲り幹だけが残つた枯れ木で、それを目にして荒れた土地だと思つた記憶がある。そして、土地を買い家を建てた翌年には、これも景色として面白いかもと切るのをやめる気になつた。それが三年目には、この老木は虫の住処を提供し、その虫をキツツキが探して木に穴をあけ、その穴にキノコが生え、菌の力で朽ちた木は地面に広がり土となる大きな自然の営みに気づいたのだ。そう、この世に意味のない存在はひとつも無いことをリアルに理解した瞬間だ。



ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていくことも実感できるのではないかという思いは今でもかわらない。ただ、他者というのが社会や人間関係を差すだけではないと思えるようになったのは大きく違う。太陽や風や雪の日々の変化や、生き物や木々の振る舞いに目をやり、それらと呼吸を合わせるようにして自分が生きていくことを感じることができるような気がしている。社会的承認欲がまったくなくなつたわけではないが、それで心が不安になるといったことはなくなつた。むしろ穏やかな気持ちになれる。

こんな気持ちの変化を与えてくれたのはこの竹山の土地なのだが、思い返せば単なる偶然の出会いが、その先に自分にとって重要な意味を持つことになるとは、まったく不思議なことだ。ひとから「石塚さんは、どうして田舎暮らしのような生活をされるようになったのですか。」と聞かれた時に「それは、神様の導きがあつたからです。」と答えると怪訝そうな顔をされるが、かなり本気でそう思っている。ただ、神様はかなり雑だ。八百万いらっしゃつたとしても、それで全世界の生き物を導くとすれば、確かにかなり大変だと思う。ひとつひとつ手取り足取り導いている余裕は到底ないはずだ。そこで、とりあえず手がかりになる事柄をバラバラとまいておく。それをうまく拾えるかどうかは当人まかせ。おそらく高いところから時々気が向いたらその後の様子を眺め、一喜一憂してそれを楽しんでいないか。

友人から「隣の土地が売りに出ているんだけど買わないかい。」と湿地同然の土地を紹介され、まともに取り合わないのが普通だと思う。それを魔がさしたように買ってしまい、野遊びの場所程度に思つていたのが、いつの間にか老後の蓄えを使い果たして住まいをつくることになり、今は、ここを終の住処と思つている。そして、そのことが引退後の自分を見つけることになるとは。何がその先の自分に重要な意味を持つてくるのか見分けるのは無理だと思うが、何か心にひっかかるものがあれば、それはもしかしたら神様が蒔いた導きの種なのかもしれない。その種は誰か特別な人にだけ与えられるものではなく、誰にでも与えられるものでありそうだ。というか、かなり雑にバツと蒔いているような気がする。それに目を向け手を出すことができるかどうかはその人次第。そういうことなのかもしれない。

今はコロナ禍でそれまで当たり前前にできていたことを慎重に、あるいは抑制して行動しなければならぬ状況になっている。もし、今でもまちなかのマンション暮らしをしていて、現役から完全引退したあとにコロナ禍の状況に置かれたら、私たちは、いったいどのような生活をしていたのだろうかと思う。神様は、そこまで見通して種を蒔いたのかはわからないが、この竹山の土地に導いてもらったのには深く感謝している。

最近わかったことだが、神様は私たちのことだけでなく竹山のこの地の将来も見越してこの地に導いたのではないかと思う節がある。そのことについては、もう少しあとになっていから触れたいと思う。

